

ふるさと "風"

第52号 (2010年9月)

風に吹かれて (32)

白井啓治

『熱波に枯れた雑草の抜いておる痩せ男』

記録的な猛暑日の続いた夏であった。暦の上ではもう秋なのであるが、蟋蟀は鳴けど、熱帯夜はまだまだ続いている。記録を何処まで伸ばすのやら。

例年であれば、この暑いのに雑草の奴は元気だな、と庭を侵略してくる雑草を引き抜くのに大汗を流している筈であった。しかし、この夏は少し様子が違っている。庭に小さな家庭菜園を作っており、今年は茄子とオクラを育てているのであるが、あまりの暑さなので、全体に散水する方法から、根本に細い穴をあけて、そこから水を流し込み根に直接水を供給する方法にしてみたのである。そうしたら、茄子とオクラは元気に生き生き。雑草達は熱波に打たれて枯れてきたのである。雑草が枯れてくると藪蚊の発生も少なく、実に有難い現象が起きたのである。特に我家のお猫様、耳ちゃんはクーラーが嫌いなので、暑いさなか殆どつけないでいるものだから、蚊の奴ら汗の臭いを嗅ぎ付けて隙間をさがし家の中に入り込み、この痩せ男から血を盗むのである。その蚊がこの夏はいない、少ないのである。

根本に直接給水する方法が功を奏したのか、オクラの成長が実に見事であった。一日に3センチ近くも成長するのである。朝、あと二日ぐらいかなと思っていたものが、夕方にはもう食べごろに近いオクラに成長しているのである。これには驚いた。しかし、熱波の所為なのだろう。花の寿命が短く儂いものになってしまった。朝顔ほどでもないが、昼間の熱波に撃ち殺されてしまった。

猛暑、酷暑の真ただ中のお盆休み。小生はクーラー嫌いのお猫様「耳ちゃん」の仰せの通りクーラーもつけないで、パソコンがパンクするのはないかと思う程の暑い部屋の中で、ことば座11月公演の台本を書きあげた。「難台山城落城哀歌」である。

岩間の伝え話にある「難台山の赤いスキ」と打田兄の調べてくれた岩間・押辺の地名の由来となる「子忍の森」をモチーフに、奥方としか伝えられていない小田五郎藤綱の妻を主人公にした恋物語である。物語のプロローグには、方丈記の(一)と(三)を引用してみた。はじめは、平家物語を引用してみようと思ったのであったが、藤綱の何故今さら南朝に加担したのかを考える時、方丈記の三の「すべて、世の中ありにくく、我が身と栖との、はかなく、あだなるさま、また、かくのご

とし。いはむや、所により、身のほどにしたがひつつ、心を悩ます事は、あげて計ふべからず」が思われてしまったので、咄嗟に方丈記を引用することに決めたのであった。同時に、この方丈記を小林幸枝に仕舞のように手話の舞いをイメージさせてみたら面白いものになると思ったのであった。小林幸枝の圧倒するスケール感で、方丈記を手話による仕舞に舞えたら、世界の舞台に立つても全く引けを取らないであろう。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会もお陰様で今回でまる四年をクリアしました。当会では、ふるさとへの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

恋瀬川と男女川

鈴木 健

「水無川（みなのがわ） 今男体、女体の間、南へ降る溪流を、美那乃川と呼ぶ。歌名所なり。末は大貫村にて、櫻川へ注入す、長さ一里余り。

筑波禰のいは（※岩）もどろにおつる水 世にもたゆらにわがおもはなくに」（万葉集）

つくはね峰より落るみな川こひそつもりて淵となりぬる（後選集 陽成院（吉田東伍）『大日本地名辞書 坂東』富山房一九二二年）

ここに転載された後の歌は、陽成天皇（八六八年～九四九年）が退任後に光孝天皇の皇女媛子（スイシ・やすこ）内親王に贈ったもので、百人一首に採録されている有名な和歌だ。そして「水無川」「美那乃川」「みな川」は、現在の「男女（みな）川」のことである。しかし、「男体、女体の間、南へ降る」とそれは、川と名づけられるようなものではない。

豪雨の後は「岩もどろに落つる水」ともなるうが、日ごろは「水無」の川にふさわしく、狭く細く岩の間を流れる「沢」だ。筑波山に数多くある、ところによつては下水路になる、ごく普通の沢の一つにすぎない。そのような平凡な沢が、なぜ「歌の名所」になつていたのであろうか。これがほんとうに「みな川」なのであろうか。「男体、女体の間」を下るから男女川（みなのがわ）だ。男女川だから恋というが、陽成院の歌では「みな川」であつた。ということとは「みな川」に「男女川」という字を当て、「男女川 恋ぞ」という書き方をして、ミナと恋とを結びつけたのは、後のことであつて、陽成院自身は「みな」に「男女」をあてはめてはいなかつたことになる。そうすると、みな川は男女二峯の間から流れ出る川だという根

拠も、男女だからという根拠も消え失せることになる。陽成院の歌に合わせて無理に当て字をしたのが男女川だったのだ。では「みな川」はどの川か。そしてそれは、なぜ「恋」とむすびつつか。

筑波山の周りで川らしい川といえば、西の桜側と東を流れる恋瀬川だけである。奈良時代に今の石岡市に府中が置かれてからは、東海道の終点のそこが筑波山の表玄関口となり、山に入るには必ず恋瀬川を渡ることになる。したがって、遠来のあるいは遠国の人にとつて筑波の川といえはこの川以外には考えられなかつたはず。そして、筑波山や恋瀬川の認識も、当然、常陸国国府からの印象が中心となつていたのであろう。国府のあたり、例えば国道6号線の恋瀬橋付近からの恋瀬川の眺めは、まさに、「源は筑波の山より出で、「高浜の海に入る」（『常陸国風土記』茨城郡）の観があり、見る人の目には「つくはねの峯より落つる」と映じたはずである。となれば「みな川」はこの川のことであろう。陽成院や彼をとりまく人たちはそのことを承知していたのではないだろうか。そして、陽成院自身は、媛子内親王に対する想いが「恋瀬」すなわち淡い恋から「恋淵」つまり深い恋に変わつていったことを歌に託したかつたのであろう。「つくはねの峯より落つる恋瀬川 恋ぞつもりて淵となりぬる」と告げたかつたのであろうが、「恋瀬川 恋ぞつもりて淵」ではしろうと染みるので、その「恋瀬川」に別名の「みな川」を宛て、それを裏言葉として恋瀬川であることを読み取ってもらおうとしたのであろう。恋瀬川だからこそ「恋ぞつもりて淵」が生きているのであつて、そのような含みなしの「みな川こひそつもりて

ふち：」では意味が通らない。そこで、その認識の前提には、貴族社会の教養になつていた「古今和歌集」（九〇五年）の中の、「世のなかは なにかつねなる あすか川 きのふのふちぞ けふにはせになる」（説人しらす）という歌についての共通理解があつたことがうかがえる。

さらに、江戸時代になると、男女川が恋瀬川であることを断定する表現が現れる。

「男女川 一 表川（オモテガワ）恋瀬川 土手 南二 十五丁 北二十八丁 元和年中（一六二五年～一六二四年）六郷兵庫頭様御領之節、築き始り申候」（平村（現・石岡市）古今抜要集 一八〇六年）

「男女川は表川のことなり。」（府中（現・石岡市）平城 往古事記 一八七六年）

「東條より落水 一 天野川（あまのがわ） 漁臘運上（ぎょうろうじょう）漁労税なし 筑波山男女川より落水 一 恋瀬川 右同断（右と同じ）」（三村（現・石岡市三村）銘細風土記 一八七六年）

最後に「恋瀬川」と「みな川」の由来・語源について簡単に触れる。『八郷町誌』に恋瀬川は「小泊瀬（こはせ）川といつたらしい。足尾山が小泊瀬山と呼ばれたことは常陸国風土記にも書かれており、この川はその麓の辺をながれるので小泊瀬川と称え、それがなまつて恋瀬川になつたのであるまいか。」とある。石岡の鹿の子遺跡からは「小長谷」と墨書した土器が出土している。今でもこの川沿いには「長谷川」さんという旧家が多い。そして、現地の年配の人たちはこの川を「コハツセガワ」と呼んでいる。しかし、「それがなまつて恋瀬川」には無理がある。そこで小泊瀬川の「泊」の字を、非常に似ている「汨」と取り違えたのではないかと考えたい。往時漢字の誤記・誤読は当

たり前のことであつた。「汨」はイツと読む。毛筆書きのことであるから、行書体的な書き方になり

「泊」と「汨」とはまぎらわしかったことが考えられる。そこから小泊瀬川を小汨瀬川と読み違えた。あるいは小汨瀬川と書き換え、そのとおりコイツセと読んだ。その読みに「恋瀬」のじをあてるようになったのではなからうか。さらに想像を加えるならば、小泊瀬山や小泊瀬川と名づけたら、汨という字を知っていたり、恋瀬川という字を考へたりするのは、かなり教養のある人に違ひなく、おそらく、中央から国府に派遣された官人であろう。ちなみに、「恋瀬川」は「続後拾遺和歌集」(二三六年)や「新拾遺和歌集」(二三八四年)にも見えている。

一方、「みな川の川」の「みな」はもとはメナであつた可能性が高い。メナはアイヌ語で、「上流の細い枝川」あるいは「支流、細流、源流」などの意味があり、アイヌ語のまま、あるいは、古くからの縄文語として、メナ・ポン(小)・小目名・メナ・目名・目名川・目名沢・女那川などカナや漢字をあてて北海道南部から東北地方北部を中心に分布し長野県などにもみられている。『』の茨城訛りでミナの川ではなからうか。皆川さんという姓も、もしかしたら源は同じかもしれない。昭和の始め、男女川というしこ名で一世を風靡した横綱がいたり、清酒の銘柄になったり、筑波にお株をとられているが、「みな川の川」の元祖・本家は「恋瀬川」。そしてそれは、石岡市内だけを独占的に流れるかわなのだ。…これはつたないわたしの見解。百人一首の「みな川の川」ははたしてオラホの川だったかどうか、痛切、定説にこだわらず、多くの方々の検証をお願いしたい。

スローライフ讃歌(一)

菅原茂美

先日、新聞広告に、『グータラしてたら、美人になっちゃうぞ♡』とあつた。こうすればアラフオーは、もう一度恋される…とのこと。即ち、メークが面倒臭い、スキンケアも面倒臭い。睡眠こそ、グータラ美容術…なのだそうだ。

正に我が意を得たり。私は美容のことは全く音痴だが、厚化粧して目立つより、自然の健康なお肌を男心は惹かれる。持つて生まれた「構造」は根本的に変わらないしろ、そこから醸し出すムードというか、燃えるような瞳に強く惹かれる。心がけ次第で、いくらでも輝きを増すはず。当然、異性は、実際行動はともかくとして、年齢や立場を超え、精神的に、恋の奴隷に陥るもの。いつもその人の傍にいて、ほのかな雰囲気浸っていたと思うもの。

恋は活力の源泉。明日への希望。

さて、そのお肌を荒らす最大の敵はストレス。ストレスは、数値ではつきり示せる明確なものではないが、オキシダント・紫外線など、回避できるものは、当然避けるとして、簡単に回避できないのが、最大原因の「対人関係」。

『角を矯(た)めて牛を殺す』ともいうし、西洋の諺にも『治療が病気よりも悪いことがある』とも言う。対人関係というものは全く厄介なもの。何かに凝り固まっている相手は、どんな手を打とうが、今更性格が変わるわけもない。対人関係の改善はまず至難の業。こちらの思うようになどなりやしない。

古女房は、口うるさく、その口数がもう少し少なければ…などと思ったりもするが、そこで短絡

に走れば、元も子もなくしてしまふ。これまで、やせ馬2馬力で辛苦を共にしてきた仲だ。その労苦をねぎらい合うのは当然の事。口に出さなくとも、感謝の気持ちは互いに重要。金婚式も近く、若い先短いお互いなのだから、まあ我慢するところは我慢して、波風立てず、余生は、何とか丸く納まりたいもの。

一方、こんなクダラナイ上司や同胞なら、いつそのこと止めつちまえ…と会社を飛び出すのは簡単。しかし冷静に考えたら短気は損気。明日からすぐ、路頭に迷うのは必定。ストレスは、我慢するか、蹴飛ばすか、巧妙に解消するか。そこは己の才覚で、自己解決するしかない。

さてお肌の話に戻ると、いかにして、ストレスを解消し、さわやかな睡眠にいざなうか。それぞれのノンビリズムをいかに開発するか。殿方の心を掴み、うっとりさせ、燃えるようなお肌。それを得るには、ガマのあぶらも草津の湯も不要。内側から湧き出る生命の活力。存分の睡眠。これしかない。知性と教養が、オーラを放つ。目が輝いていれば、これに勝る美はない。幻像は、いつか実像と化すことを期待し、男も女も睡眠時間をタツプリとり、はかない恋の夢を見続けたいもの。

私ごときに「恋」など語るムードも経験もないが、空想の上でなら、どんな場所にも登場できる。孫悟空に、チョイト筋斗雲(きんとうん)を借りれば、時空を超え、クレオパトラでも楊貴妃にでも、すぐ会いに行ける。一大メロドラマを組立て、そのど真ん中で、縦横無尽に活躍。才能があつたら、そんな小説でも書いてみたいもの。

コチコチ頭の私は、今まで物理・化学・分子生物学等に基づいた、人生観を書いてきた。特に自

分とは何か？ 人間とは何か？ いい歳をして、この世のなんたるかを、いまだ悟りえず。人類の進化論を中心に、動物と比べ、人間の本质を探りたいと、今日まで書き続けてきた。ノンフィクションを主体に、時折、未来の夢など重ね合わせて書き続けてきたが、益々迷路に陥り込むのみ。青竹を割ったような明答など、到底出てくるはずもない。

その点、小説家などが、全くのフィクションを組み重ね、壮大なドラマを築きあげるのには、羨ましい感じもする。何でも空想の上で、巨大なビルを、構築すればよいのだから。材質の強度も劣化の速度も、細かい数式や建造コストも関係ない。最終的なイメージを頭に描けば、スラスラと、その筆力で、感動のストーリーが完成するのだから。

経済戦争のドス黒い暗躍・王侯貴族の華やかな社交場・清貧を克服してのサクセスストーリー等々。そしてバラの花の香りが、文面から漂うような、甘く切ないメロドラマ等、描けたら思いっきり書いてみたいもの。しかし、やはりそれなりの「経験」がなくては、ものは書けまい。相応の授業料を払わぬことには、人を感動させるに足る、機微な表現などできっこない。こちらは、50年間、明けても暮れても、動物の病氣と闘ってきた武骨漢。そんな男に、繊細な女心など分かってたまるか…と反発を喰らうだろう。しかし、誰になんと言われようが、女と男の燃えたるような情炎の絡み合い。そんな激情に命を燃やす光景を、単なるドラマとしてではなく、これこそ、人類進化の原動力として、絶対不可欠であった、などと表現できたら…夢のまた夢。

さて話を元に戻そう。スケベジジイが、なにを

つまらぬことをぬかすか…とヒンシュクを買うかもしれない。しかし女も男も、日頃、健全な生活環境から、真の活力が湧き出し、周りに快活なムードをまき散らす。恋は明日への原動力。談笑の絶えない所に当然、人が寄ってきて、素晴らしい雰囲気包まれる。友情は深まり、仕事も順調。傾いた企業経営の立て直しとか、職場の結束とか、ひびの入った夫婦間のとり持ちとか、色々調停役は、神経を使い、苦勞すると思うが、私に言わせれば、人間の心理は、まず肉体の健全化が第一。緊張をほぐし、談笑効果こそ健康を生み出す手軽な手段。溢れるほど唾液が分泌される状態こそ、健康の源。

昔、『健全なる身体に、健全なる精神が宿る』と教わったが、「身体」という漠然とした表現では説得力に欠ける。具体的に、体中のどの組織の、どの細胞が活性化すれば、どんな心理状態になるのか。現在は徐々にその辺が明らかになりつつある。教育も、具体的な根拠を明確にしない漠然とした精神説諭だけでは、人々に強烈なインパクトを与え得ない。

人間が幸福感に満たされるためには、細胞の活性化を図り、生理的に、安定した生命活動が行われる状態に持つていくことがまず第一。心理学がどうの、対話術がどうのなどは二の次。例えば、緊張状態が長続きし、唾液の分泌が少なければ、食道炎・胃酸過多・胃潰瘍・十二指腸潰瘍等々。こんな状態で、学業や作業能率や、営業成績を上げたりするのは至難の業。話術や接客態度がどうのと言ったって、顔で笑っていても、胃痛のため、心が沈んでいては、相手にハートが伝わらない。

【断腸の思い】という言葉は、子を失い、悲し

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

- 9月12日(日) PM3:00~村治奏一ギターリサイタル
- 10月3日(日) PM3:00~長谷川きよしコンサート
- 10月11日(月) PM3:00~吉川二郎ギターリサイタル
- 10月17日(日) PM3:00~4本の花 若手女性4人によるギターコンサート
- 11月7日(日) PM3:00~ハーブの調べ
- 11月21日(日) PM3:00~福田進一ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299-43-6888

みのあまり死んだ母猿の腸が細かくちぎれていたという故事から来たもの。誇張にしろ極端な心理は肉体を蝕む。古来中国のほら吹きは雄大である。「白髪三千丈」「万里の長城」(4000 km)なのに、1万里は、地球1周と同じ、ほぼ4万kmに相当。「虎に翼」など】

肝心なことは極めて単純、バランスが良く保たれていること。即ち心地よく摂食し、心地よく排泄。栄養・ビタミン・ホルモンなどが潤滑に回転する事。そして休養睡眠が十分で、翌朝キチンと「リセット」されること。これが生き物の基本原理だ。

【唾液は口腔粘膜にある「小唾液腺」と、耳下腺・顎下腺など「大唾液腺」から分泌される無色・無味・無臭のやや粘りのある液体である。唾液は食物成分を溶かして味を感じさせ、食欲を促す。そして口腔内の乾燥を防ぐ。更に、デンブンを消化し、唇と舌の動きを滑らかにし、咀嚼・嚥下・発声を助ける。更に口腔内と歯の清浄化を保つ。ヨダレの多い赤児は良く育つ。動物も唾液で傷を治す。人も愛し合う者同士が唾液交換すれば、心の傷を癒す。正常な成人の1日当たり唾液の分泌量は、1.5リットルである。】

特に、唾液に含まれる消化酵素のプチアリンと、マルターゼは、デンブンを麦芽糖からグルコースにまで分解する。粘りの元になるムチンは、消化管粘膜を滑らかにし、食べ物の塊の通過を円滑にする。これら唾液の分泌は、自律神経系の支配を受け、交感神経は、唾液腺の血管を収縮し、唾液分泌量を抑える。副交感神経は、唾液腺の血管を拡張して、薄い唾液が、大量分泌される事になる。【健康増進を唾液一つにこだわると、まるで一神

教の原理主義みたいなのに、相手にされないかもしれないが、生きる原点である食べ物を、スムーズに取り入れる唾液こそ、最も重要な要素である。どんな世界も、笑いやユーモアのない頑固一徹のガリガリ亡者では、周りの人も疲れる。人が集まり、談笑が絶えないスローライフからこそ、社会は纏まり、平和を招き、繁栄していくものと考えられる。

いらざる緊張の除去・和やかなムードを醸し出す雰囲気作り・経済至上主義だけがこの世の全てとする低俗な考えからの脱却、達観。愛しき子孫のために、今我々は、地球の未来を真剣に考える必要がある。現今の加速度的な経済発展は、必ず環境汚染を伴い、資源の枯渇につながる。未永く地球上の生物が繁栄していくためには、再生可能な循環を図る事。高速展開する諸々のスピードを緩めること。スローライフの実現こそが、地球を救う。

さて、ノンビリした光景。これに勝る平和はない。スローライフこそ、平和のシンボル。私は中米ホンジュラス国で、JICAの国際協力の一環として、国民の栄養改善のための養豚開発プロジェクトに獣医師として参加した。熱帯とはこういうものかと改めて認識し直されたのは、なんと、やることなすこと全てが、超スローモードであること。例えば、100メートル離れたところから、自分の乗りたいバスが走っていると、手を挙げ合図する。するとバスの運転士は車を止め、ジックリと待つてやる。しかし乗りたい方は決して走ろうとしない。走れば熱帯の日中は大汗をかく。互いにそれが分かるから、いくらでも待つ。またある時、市の郊外で母豚が、バスの通る道に寝ころび、子

豚に乳をやっていた。

【この国では豚を放飼し、小規模経営では自分の豚を飼育する小屋がない。「焼き印」で所有権は分かるが、雑穀やイモ類の屑をもらうから、豚は家の周りにいるものの、普段、野草などを食べ、「のら豚」そのもの。残飯整理係でもある。発情すれば何処かの家のオスと適当に交尾して帰ってくる。放浪癖の強い豚は、「首枷(くびかせ)」をはめられ、犬みたいに、ヒモで木に繋がれたりしている。】

すると運転士殿は、豚がそこをどいてくれるまで、バスを止めて動かなかった。乗っている日本人は、イライラ。しかし現地の人々は黙って、いくらでも待つ。彼等が敏捷なのは、サッカーの試合中のみ。

【中米は、何はさておき先ずサッカー。1969年、世界杯地区予選で、ホンジュラスは、隣国エルサルバドルと試合がこじれて、ついに本物の戦争に突入した。】

JR福知山線で、列車を定刻に合わせるために、カーブを高速運転↓脱線転覆↓多数の死傷者(スイスの氷河鉄道も同じ轍)。一方、豚がどいてくれるまでバスが動かない。どちらが真の文明国？

ラテンアメリカの底抜けの明るさ。深夜2〜3時ごろまでは夜毎、音楽とダンス。こちらはうるさくて眠れない。ホールの近くのホテルを常宿にしたこちらが悪い。(彼等の昼休みは3時間。たっぷり昼寝をし、深夜の遊びに備える。)しかも、現地の綺麗なネーチャン達は、どんな下心があるのか知らないが、臆病者の小生を、ダンスに何度も誘ってくる。こちらはバカだから、その後ろに、どんな怖いお兄さんが付いているか? などとす

ぐ勤める。(若い娘は、彼氏がありながら、平気で他の男を誘う。熱帯の底抜けの開放性には、いささか面食らう。)しかし、こちらは歳をとっており、勿論お金はかなり持っている。ゲスの勤ぐりで、すぐ最悪のことを考えてしまう。遊び慣れないカタブツほど醜いものはない。

【ホ国着任早々、当面3か月ほどの生活費(月2万円ほどで十分)として、米100ドル紙幣7枚を、当地のレンピラに変えるため、銀行を訪れたら、通訳と私は、赤絨毯の重役室みたいな部屋へ通された。

色々なもてなしを受けたはいいが、100ドル紙幣7枚の裏表全部をコピーし、『この紙幣は○年○月○日、日本の菅原が持ち込んだものに相違ない』という書類にサインさせられた。当地の普通のサラリーマンの年俸に相当する額だが偽札でも横行しているのだからか。ホ国はスペイン語。面積は日本の3分の1、1997年の人口595万人、国民所得は一人1日2ドルである。今、世界人口の半分は、一人1日2ドルで生活しているが、その半分おおよそ16億人は1ドル以下で生活している。国営の発電所は予算不足でしょっちゅう停電。それなのに戦闘機は毎日ブンブン飛んでいる。識字率は73%だが義務教育の6年間をともに卒業するのはほぼ半分。道路舗装率19%。平均寿命・男66歳、女71歳。治安と衛生は極めて悪い。一般市民が普通に拳銃を持っている。私は生ものなど非常に注意していたが、アメーバ赤痢に感染し、3日間で7kg体重が減った。よくぞ死ななかつた。】

さて、中南米の人種は、国による差は多少あろうが、モンゴロイドのインディオと、スペイン系等の白人との混血(メステイソ)が90%を占める。

残りはインディオ純粹種、白人、黒人などである。白人の血が濃いほどルックスは良い。特に若い娘の、あの妖艶な眼差しにはこちらいい歳をしながら、タジタジ。若いダンスの好きなメステイソの娘たちは、身長170cmぐらいで、脚は長く、顔の彫りは深く、殆ど白人に近い混血で、フラメンコダンスサーや、よくテレビで見るリオのカーニバルに出てくるダンサーそっくりである。その娘達が、くびれた腰をくねらせ、夜通し踊りまくる。その輪に入れ…と手を引かれても、若い時習ったマンボやルンバならともかく、サルサやブントなど、とてもついていけない。

アリとキリギリスの話の思い出したが、あれは、緯度の高い所で生まれた話なのであろう。アリは冬に備え、セッセと冬越しの食糧を蓄えるが、熱帯ならば、別に蓄えなくとも、一年中、食べ物はその辺に何かはある。毎日キリギリスで暮らせるのだ。所有権など不明なマンゴウ・バナナ・パイア・オレンジ・グレープフルーツなど、路傍に無造作に生えている。市内、恋瀬川の河川敷に、桑の実が沢山実っているように。名前は忘れたが、おいしいその他の果物がいくらかでも実っている。遊んで愉快に暮らせるならば、浮世のバカは、なぜ寝ずに働くのか…ということになる。収入は少なく、贅沢はできないだが、別世界を知らなければ、この世でこんな楽しいことはない。(そもそも私が熱帯行きを決断したのは、とにかく熱帯の動植物を見たかったのと、トロピカルフルーツを食べたかったからである。それに定年までは、男たるもの妻子を養う義務があるが、還暦を過ぎれば余禄のような人生。後は野となれ山となれ。業務で死んだら国が5千万円を補償してくれると

いう。生きて帰ったので女房のヤツ、がっかりしたかな?…とにかく、外交官パスポートと、国際自動車運転免許証を持ち、狂犬病と炭疽病のワクチンを打って、イソイソと出かけていった。)

【議員等の先進国視察も良いが、帰りには必ず発展途上国も視察してほしい。先進国の傲慢な浪費と、途上国のつましやかな暮らしの両方を見て、地球の将来に、どちらが大事かをよく考えてほしい。】

そこで武蔵は考えた。日本人みたいに、成果主義だ、ノルマ主義だと胃袋を痛め、行き着くところは、過労死。治安と衛生がどうにかなるのなら、日本の年金を受け、途上国で余生を送るのが最高。熱帯の、貧乏でも底抜けの明るさで、超のんびりのあの生活。正にパラダイスだ。この世に生まれ、どちらが幸せか? このことは、先進国と途上国だけの話ではなく、拡大解釈すれば、人間とネコとで、どちらが幸せか? という話にもなる。この世に生を受け、やたら世間のしがらみに取りつかれ、汲汲セカセカの人生を送るくらいなら、気ままでノンキな猫の方がずっと幸せ。あゝア、吾輩も猫になりたい。

工房オカリナアートJOY
母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。
あなたの庭の土で・・・また大好きな雑木林に一摘みの土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。
オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel.0299-55-4411

八月二十六日、美浦村の陸平貝塚遺跡を見学してきました。見学に行ったのではなく、ついでに見学をさせていただいたのです。

ことば座6月公演に、美浦村の劇団「宙の会」の市川紀行さんが、「陸平をヨイショする会」の皆さんをお連れいただき、来年二月に行われる「縄文の森コンサート」にことば座を招いて下さる下見をされて行かれました。その時、会の方にモダンバレエの小峰久美子さんが居られ、私の舞いを見て、是非一緒にやってみたいとお話があり、早速打ち合わせに、陸平遺跡のある美浦村文化財センターへ白井先生と出かけてきました。

陸平貝塚は、霞ヶ浦南岸に面した小高い台地にある縄文時代の貝塚遺跡です。台地の全体が貝塚になっていて、全国屈指の規模を誇る貝塚遺跡です。遺跡の発掘調査は、住民参加で今も続けられています。貝塚からは、土器をはじめとする暮らしの色々な出土品や、人骨なども出土しています。陸平貝塚は縄文時代の中・後期（5千年～3千年前）のもので、その当時は、この台地の下まで霞ヶ浦が内海として広がっており、時には鯨も迷い込んできたのだと思います。

貝塚遺跡のある森は、縄文の森と呼ぶにふさわしく、遠くいにしへの面影を確りと残した森でした。一部公園になっている広場に立ち自然林の森を見わたしていると、以前に「霞ヶ浦讃歌・風の姿」という縄文人を主人公とした物語を演じた時のことを思い出し、この貝塚の森でもう一度演じてみたくなりました。そのことを白井先生に話したら、その時の一部を抜粋し、小峰さんのバレエ

とのコラボレーションでできる本を考えてみようと言われました。どんな本ができるのか楽しみです。小峰さんと一緒に『ひびけ心の声 とどけ心の声』と『歓びの大地の舞』を舞えることを今から楽しみにしています。

その前に、先ずは十一月の「難台山城落城哀歌」の舞いをしっかり創らねば…。

古代エジプト文明の風にふかれて(6)

兼平ちえこ

三月八日～十五日エジプト周遊八日間の旅をお伝えしています。

六回目となります今回は、エジプト歴代王朝のファラオの中でも「ファラオの中のファラオ」、「太陽の王」、「建築王」等と讃えられ、九十年という長い人生の中、最愛のネフェルタリをはじめ王妃七人と百人を超す子供達に囲まれ、人生に悔い無しと言えそうであるラムセス二世の不朽の名作、世界遺産に登録されたアブ・シンベル神殿から参ります。

スーダンとの国境近くのアブ・シンベルは、かつてエジプトにとって、南方の脅威だったヌビアと呼ばれる地方にあった。

ラムセス二世は、このヌビアの地をこよなく愛し、ここに自らの神殿と第一王妃ネフェルタリの神殿を建設したと言われている。

しかしヌビア地方の人々はたびたびエジプトを脅かす存在だった。そこで、ラムセス二世はエジプトの国力を誇示する為、戦略上の要の地である

アブ・シンベルに巨大神殿を建設したとも言われている。

高さ二十mに及ぶ四体のラムセス二世像のある大神殿、二体の王妃ネフェルタリと四体のラムセス二世像のある小神殿、いずれも砂漠の中の砂岩の岩山を彫ったものだそうで、そのスケールの大きさに驚くばかりであった。

一九五四年、農業用水確保と水力発電の為、ナイル川にアスワン・ハイ・ダムを建設する計画が発表された。

ダム湖に水没するアブ・シンベル神殿はじめ多数の遺跡を救済しようというユネスコの呼びかけに世界各国が応えた結果、神殿は小さなブロックに分割され現在のところに移設された。

一九六三年から五年の歳月をかけての大事業となったが、貴重な文化遺産は無事守られたのであった。

アブ・シンベル大神殿

正面には高さ二十一mのラムセス二世の巨像が腰掛けた状態で四体並んでいる。それぞれ足元には子供達の像があり、両左右二体ずつの間口にはネフェルタリ王妃の像が左右にある。

この四体のラムセス二世像は向かって、左側から二番目の頭部が崩れ落ちて足元に転がっていた。移転前の状態にしていると云う。

残る三体の顔は微妙に異なっており左から順に老年の顔になっていると言いう事であるが…、同じように見える…、それともその若さを保っていたのだろうか。

その他、十体のヒヒの像、太陽神ラー・ホルアクティが入口の上部に彫られている。

内部にはラムセス二世が雄々しく戦う姿や、

神々に祝福される姿等のレリーフで埋め尽くされていた大列柱室、儀式用の呪文等が書かれたパピルスが置いてあったと言われている図書室、同様の部屋が三室、倉庫二室の間を進むと至聖所で四神を祭る。

向かって左側から太陽神ラー・ホルアクテイ、神格化されたラムセス二世、王の守護神アメン・ラー、造物神プタハの像が並ぶ。

年に二回、二月二十二日と十月二十二日、朝日が至聖所まで真つすぐ差し込んで、神々の像を照らし出すという。

大神殿は太陽の昇る東向きに造られ毎朝、最初に朝日を拝むヒヒ達の像に日があたり、次いでラー・ホルアクテイとラムセス二世の巨像が照らし出される。これは夜、すなわち死の世界から甦る再生復活を表し、年二回至聖所に真つすぐ光が差し込むのも祭られている神々が太陽神と結合して、より強くなるようにするためだという。

こうした太陽の動きを巧みに利用し、綿密に計算された設計に注目の説明があった。

アブ・シンベル小神殿。

ラムセス二世の第一王妃ネフェルタリとハトホル女神に捧げられた神殿で大神殿から北百mほど離れていた。

ネフェルタリと言う名前は「最も美しい女性」を意味し、七人いた王妃の中でも、最もフアラオの寵愛を受けたとされ、王妃の為に神殿が捧げられたのは、古代エジプト史上初めてのことで別格の扱いを受けていたようである。

まず、入口にはネフェルタリの立像が二体、ラムセス二世の立像が四体、入口を真ん中として左右に王妃を守るように三体ずつ彫られていた。王

と王妃いずれも高さは10mほどであった。

王妃とラムセス二世と対等に描かれているレリーフが印象的な壁や柱のある列柱室、ネフェルタリ王妃の戴冠式等々、彩色の残っているものも見られた前室、そして至聖所には牛の姿をしたハトホル女神が彫刻されており、顎の下にラムセス二世の像が立っていて、一説にハトホル女神はネフェルタリ王妃を表している、ラムセス二世を保護していることを象徴しているという。

王妃は神殿の完成を見ることなく四十歳代でこの世を去ったといわれている。

アブ・シンベル大・小神殿は、大きいばかりでなく、さまざまな箇所思いがけない秘密が隠れていると言われ、ゆつくりとラムセス二世と神々の発信した、メッセージを読み取って頂ければとのことであった。

そして、エジプトの偉大さを示す為に造った大・小神殿であったが、反対にヌビアの人達は「こんな凄惨な物を造れる国を手に入れた」と三百年後にエジプトは彼らに征服されたそうである。

ご愛読頂いている方からエジプトの旅はいつ終わるのかと心配かけています。

次回はアスワンに戻り、列車ナイル・エクスプレスで十二時間余り、カイロに向かい、アレキサンドリア、カイロそれぞれの市内見学、帰途につきます。

- ・今夏上陸 エジプト太陽神
- ・焦げ付いて蟬一人

ちえこ

やつれても花をつけて

伊東弓子

小さな花を踏みつけて通り過ぎたのは、暑い夏を迎えた七月だった。初夏の頃から感じていたものが噴き出した出来事だった。赤味がかった花だから葛だろう。葛の早咲き、こんな暑い時に咲くのかな。それとも藤の狂い咲きかなと首を傾げながらも、戻ろうともせず走っていた。藤も狂い咲きするとあんなに色よく咲くのか。二度咲くなんていいな。年老いていく身がそんな事を思うのは可笑しいな。否、老いはつきり分かった今だから、残り少ない時間を悲しい焦りだろう。出来もしない事を考える悲しい焦りだろう。

今年桜の花よりも、藤の花がとも気になった。そうなるによく目につくものだった。質素に見えたり、華やいでも見えた。時には妖艶さも感じさせた。花のもつ不思議な力だろう。人が手入れた美事なものが公園に、庭園に、観光地にあるが、私が心にとめた山藤だった。朝日を受けて社の森の藤は高く神神しかった。雨上がりには若葉と藤が彩よく輝いていた。杉木立の深緑にも似合う花の色、逞しさに抱かれているかの様だった。風の日には木々と一緒に揺れているあの人の山の藤、何か問いかけてくれている様だった。又枝の合間から見上げると、新に遠くの空の色とも重なってとても良い。見る時の条件や私の心の動きとも合わさって様な姿も目に入った。

そんな或る日、長い坂を昇っていくととり濡れたアスファルトの上に、無数の花びらが落ちていた。散らばっているという状況だ。坂が急なので昇りきる頃には「はあ、はあ」と息切れし苦しかった。花の咲いている事に気がつかなかあつ

たが、この状況を見て藤の木があった事に気がついていた。左側はぐつと低い谷津田、そこから坂を越して伸びている木々が十数本ある。大きな檜、樺、椎の木だ。その中の五、六本に蔓を伸ばした藤だった。叢の方にも蔓、枝、木の皮、花々が無残に散らばっている。誰かがとは言いたくないが、人間に決まっている。花を取る為に引っぱったんだろうが、ずるずると限りなく引っぱっても、手繰っても折る事は出来ず引き裂いた時には、花は殆ど落ちたのだろう。どの位持ち帰った事か、必要のない物は叩き捨てていったのだろう。見上げればまだまだ高い所に咲いている、残念であり腹立たしかっただろう。今は何事もなかったように枝が揺れている。

今迄はあまり意識していなかったが、今回見た物を通して改めて藤全体の姿を思い出してみた。山のあちこちで見た藤、何十年も荒し放題の山を掃除した時に見た藤、沢山の姿形があった。藤は自分だけでは上にはいけない。相手に頼り絡みついて伸びていた。大きくなり太くなり纏っては相手の木を絞めつけながら、生気を吸い取るかの様に伸びていた。相手は枯れても朽ちる迄に時間が掛る。苦しい中でも藤の伸びるのを手伝っているかの様だった。あの花からその姿は想像できない。太くなった様は、「大蛇の如く」とも見える。年数が経った木膚は皮が浮き上がり剥がれていく。それでも木の真髄では脈々と水分を上げて、葉をつける為に、花を咲かせる為に働いているのだらう。太陽の光を求めて上へ上へ目指していく。

の姿は異様だった。又始めに絡んだ木が枯れたら傍の木に縋り、その木も枯らしその隣りを絞めている藤も見た。藤が育っていく中で根も盛り上がって変形していく時、木の形もかえていた。自然の中で適応していく姿なのだろう。形はどうあれ生命の素晴らしさに感動した。花をつけ、実を零し次の世代を作っていく。蜿蜒と続く。

藤に限った事ではない。私そのもの様だと重ねてみたりした。私も相手を枯らす程の情熱をもう一度持ちたいと考えているのかな。そんな事を考えるのはいかががわしい事かな。それは無理だろう。大体姿が醜くなった。大根といわれた頃の白い足とは程遠い足、半袖を着る夏は嫌だし、体も弱々ではなくなった。節縛立った手は爬虫類の様に見える時がある。皮膚も堅くなって皺が食い込んでいく。藤の古い皮が剥がれ落ち纏て土になつていく様に体もそうなるのだろう。じゃ花に値するものは何だろう。「顔」かな。髪も色褪せ瞳も濁った。唇も乾き笑顔も少なくなった。これでは花にはならない。努力もしない私は、コマージュルで女の化粧や服装に纏わるものが多いのを横目で見ている事が多い。確かに美しく仕上がっている。あの人は年相応と違う世界があるのだろうと褪めた目でみている。

私の花は「心だ」心がどんな時も一緒にいて私を弾ませてくれている。落ち込む時も、悲しい時もあるけれど、力を出してくれるのも心だ。衰えていく身を支えてくれるのも心だと思ふ。

弱ってきたとはいえずはよく歩いてくれて、人との出会いをつくってくれて。手は厭わずに仕事をしたいける。皺の食い込んだ顔には人生の喜怒哀楽が印された看板を下げているのだと思ふ事に

ことば座「風の塾」生徒募集！

ことば座では、暮らしの中で自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

- ◎絵と一行文教室（講師：兼平ちえこ 白井啓治）
 - ◎詩を手話に舞う教室（講師：小林幸枝 白井啓治）
 - ◎朗読教室（講師：白井啓治）
 - ◎エッセイ教室（講師：白井啓治）
- ※（各教室は月二回の授業。受講費月額3,000円）

詳しくは「ことば座事務局」までお問い合わせください。

ことば座事務局 ☎0299-24-2063(担当：白井)

しよう。藤に強い思いを寄せた今年だったが、藤とは遠い昔何処かで一緒だった時があったのだから、似ていて当たり前だ。いつの頃か人と藤に分かれたけれど、今一緒に此処で生きているのだから仲間だと、より一層身近に思える。

これから尚のこと、藤の蔓の様に、沢山の人の手をお借りして、力を貰いながら生きていく事になるだろうと思ふ。

興亡の連鎖(その四)

打田昇二

Ⅱ 反乱の結末Ⅱ

西暦一八一二年、ナポレオン一世によってモスクワが占領された際に市内の各所で火災が発生し全家屋の七十五%が燃えた。これはフランス軍に食糧などを取られなくする為に「モスクワ市の総督と警察とが命じて放火させたのである」とナポレオンがロシア皇帝に苦情を言っている。攻めてきて文句を言うのも凶々しいが、自分で火をつけた場合はともかく、昔は「火を放つてから攻める」のが合戦の常套手段であったようで、天慶二年(九三九)十一月二十一日には常陸国府の石岡も平将門に攻められ「戦火」で大部分の町を焼かれた。勿論、困窮するのは一般庶民であるが火災は地位や名誉で差別をしないから、宮殿でも貴族の屋敷でも平等に焼き尽くすことになる。

平清盛が力を伸ばすチャンスを手に入れた。「平治の乱」では藤原信頼に雇われた源義朝の軍勢が後白河上皇の三条殿を急襲して火をかけ、多くの犠牲者を出した。都を離れていた清盛は事件を聞いて直ちに戻り御所の警護を担当した。火事の怖さを経験してきた二条天皇が「…御所は新築したばかりだから未だ保険もかけてない。敵が攻めて来たら火をつけられる前に守備隊はわざと逃げるようにして、寄せ手に警備を任せたまはうが建物は安全なのではないか…」と見当外れのことを言った。

呆れ返った清盛は「…御所に攻めて来る者は朝敵ですから征伐しますが、火事を出すなという御命令は難儀なことです。私も武士ですから知恵を絞って此処は護ります…」と断言をした。平重盛と源義平とが一騎討ちをした待賢門の戦いなど武

士が御所内で死闘を展開するのだが、天皇が心配した火災は避けられたようである。

将門と清盛と桓武平氏を代表する二人の武将の行動を参考にした訳では無いが、應永二十三年(一四一六)の十月初めに鎌倉で謀反を起こした上杉禅秀も「戦火」を利用してながら何とも中途半端な攻め方をしたから狙った敵の大將を二人とも逃がしてしまった。鎌倉管領の足利持氏は、避難した上杉憲基の屋形が焼かれたので一旦は海岸沿いに逃げて小田原まで来た。追い掛けて来た敵は小田原の宿にも火をかけたので、持氏は闇に紛れて箱根山に入り寺の僧たちの道案内で駿河国へ落ち延びたのである。こうなると反乱軍は放火犯人と同じで単なる凶悪犯でしかない。

上杉憲基のほうには持氏が伊豆に避難したと判断して反対側の逗子に近い横須賀街道の寺まで退き対策を考えていた。其処へ反乱軍に加わった地元豪族の一隊がやって来て寺を包囲した。激戦で疲れ切った味方が百人余りしか居ないから勝ち目は無い。重臣が二十数人の兵力で必死に抵抗している間に、憲基は辛うじて脱出し越後を目指した。これが十月六日の事である。そして事件を知らせる鎌倉からの報告は十月十三日に都へ伝わった。

緊急の呼び出しを受けて室町幕府の重臣たちが將軍のもとへ駆け付けてきた。ところが將軍の足利義持は精神修養のために京都市内のお堂に参籠していて暫くは出て来ない。武將たちは、側近の者に將軍を呼び出すように言ったのだが、お叱りを受けることを恐れて取次がない。重臣たちは鎌倉の事情に疎いから事件の真相も良く把握できずに、どこかの国の政党と同じで有力者が適当な発言をするだけ…何の対策も立てられなかった。

お蔭さまで反乱軍のほうは、その間に鎌倉と小田原などを占領することは出来たが、それだけでは遠い外国へ行くのに村のバス停まで四苦八苦して辿り着いたようなもので、先が思いやられる。

「その三」でも触れたが、上杉禅秀らは関東・甲信越の武士団に「鎌倉管領」が足利持仲に替わったことを告げて服従するように言ったのだが誰も相手にしなかった。それどころか一部の武士団は彼らを逆賊として抵抗する姿勢を示した。これを放つて置く訳にもゆかず、十一月半ばには現在の埼玉県南部まで出陣したようである。

都では、ようやく將軍が事件を知った。幕府にすれば逆らってばかりいる鎌倉管領・足利持氏も始末が悪いから、消えてくれれば有難いのだが、反乱の矛先が將軍にも向けられていることを重大視した。將軍の弟・足利義嗣が失敗した反乱計画にも関りがあることがわかり、結局、上杉禅秀を逆賊と判定してこれに参加した武將及びその家来たちを正式に「反乱軍」Aクラスに格付けした。室町幕府は重臣の名で將軍による反乱軍討伐の命令「御教書(みきょうしよ)」を関東の有力武士団宛てに発したのである。最初の合戦に勝利した上杉禅秀らには予期せぬ事態となってしまう。御教書は漢字で百十字ほどの文面であるが、内容を判読すると次のようなものである。

「去る月に新御堂満隆父子(管領・持氏の叔父及び其の養子となった持氏の弟)と前の執事の氏憲入道が逆心を企てた折は、関東の武士たちが悉く(ことごとく)此の仲間に加わり暴虐の行いをしたそうだ。たとい管領に恨みがあるとしても、どうして木陰に居ながら、その大木の根を切ろうとするのか…武士の恩を受けながら、その主(あるじ)

を殺そうとするなど、前代未聞の話である。

このため、諸将には近日中に征伐の軍を向けるように命じた。そうであるから関東の武士たちよ、もし遺恨が無く改心するならば、早く始末書を出して謝り、鎌倉へ攻め込む幕府の軍勢に協力しなさい：將軍はそのように仰せられたから、このことを関東の国々に洩れなく達するように：」

この御教書の内容からすると、半分は上杉禅秀の誘いに乗った諸将たちを脅迫しているようなもので受け取った武士たちの中には動揺が走った。

一方、足利持氏が頼った駿河の今川氏は、都の將軍に状況報告を行うと共に御教書を受け取るまでもなく自ら鎌倉へ出陣する許可を貰い、且つ援軍を要請した。そして自分の領国・越後へ逃げた上杉憲基も常陸国の佐竹氏へ養子に入れた弟の義憲の協力を得て兵力を整え、鎌倉に向けて進撃を開始したのである。それらの軍勢は既に十一月半ばには鎌倉に近づいており、その為には上杉禅秀は兵を纏めて立て籠らねばならなくなった。

こうした状況は、鎌倉を脱出した二人の敵將を追って小田原の先まで進んでいた反乱軍の一隊に衝撃を与えると共に一瞬にして士気を喪失させてしまった。彼らには上杉禅秀からの「鎌倉へ戻れ」という命令と、都の將軍から出された帰順命令の「御教書」とが同じ頃に伝えられた。「御教書」とは鎌倉に大事が起こった際に執事が回覧板を回し、それを見た関東八州の兵は直ちに駆けつけること：と足利尊氏が決めた制度であったから、それを見せられた武將たちは慌てた。

「話が違うではないか：」

「幕府は鎌倉管領の持氏殿が討たれることを喜ぶ筈では無かったのか：」

お互いに顔を見合わせてこそそと相談を始め、

俄かづくりのグループを結成して一抜けた二抜けたで、あれよあれよという間に幾組かの武士団が消えてしまった。ぐずぐずしていると都の軍勢と今川の兵が西から、上杉憲基と佐竹の勢力が北からやってくる。應永二十四年の正月になると信濃国の守護職・小笠原氏が鎌倉攻めの上杉軍に協力する態度を示した。もはや「四面楚歌」である。

合戦の準備では無く、集団脱走の支度で混乱する東海道で、常陸国から出陣してきて凶らずも「反乱軍」に登録されてしまった大掾満幹、同族の小栗満重、佐竹支流の山入與義は緊急事態に際して共に対応しようと、ごった返す道端でこれからのことを相談することにした。山入與義は大掾満幹の義兄に当る。上杉憲基の思惑から佐竹家に養子が送り込まれてしまったことに反発しているから何処までも抵抗するつもりでいる。大掾、小栗両氏にもそれぞれの事情と思惑がある。

「大掾殿、困ったことになりましたな：直ぐに国許へ戻られたほうが宜しゅうござろう：」

與義は智略にも優れ、気性の激しい武将なので自分の腹は既に決まっているのだが、常陸大掾の満幹を立てて言った。

「與義殿、佐竹は動いておるようですな：お国は大丈夫でござるか？」

満幹は、與義が帰る山入地方が佐竹に囲まれていることを案じていたが、同時に大掾領地の水戸にも危機が迫っていることに気付かない。

「鎌倉になど居ては何も出来ません。一刻も早く此処を離れて国許で合戦の準備を整えなければならぬでしょう：」

真壁地方の豪族・小栗満重が、結論は出ている

とばかり辺り構わず豪快に言い放った。確かに満重の領地は、今回の紛争の原点になった越幡六郎や謀反張本人の上杉禅秀領地に近いから、早く戻らないと権力を回復した鎌倉管領に取られてしまう懼れがある。しかし、そうした意見にも危機感の薄い大掾満幹は態度が煮え切らない。

「：国許へ帰る前に、都の將軍にお目にかかり我々の事情を釈明したいと思うのだが：」

満幹は「その二」で説明した「京都御扶持衆」の立場を利用して反乱の罪を軽くして貰うつもりであるが、事態が將軍への反逆と取られている現状では無理な話である。

「それは如何なものでござろうか：」

山入與義が直ぐに反対した。苦勞人であるから権力構造の裏を良く知っている。

「：將軍は、おそらく鎌倉へは来ますまい！」

山入與義も小栗満重も京都御扶持衆ではあるが、大掾満幹ほどは幕府を信用してはいない。

「左様！たとい將軍が関東に来たとしても、あの変人の管領が出来る悪い將軍の命令を素直に聞くとも思えぬ：」

小栗満重は、京都の將軍と鎌倉管領の両方を愚人扱いにして憚らなかつた。本当は、其のとおりなので、足利一族と上杉氏の権力争いに翻弄される地方武士団の立場に腹立たしさを覚えていたのである。結局、山入軍と小栗軍とは小田原近辺から引き揚げてしまった。孤立した鎌倉にも行かず、戦意を失って行き場の無い集団の中に取り残された常陸勢は、大掾満幹が率いる数百の兵だけになった。越幡六郎や宗家である小田持家も反乱軍に居た筈であるが、途中から消息が分からなくなっている。しかし戦後に大した処分を受けていない

ようなので、余程、上手く逃げたのであろう。

反乱討伐のための幕府軍は、應永二十三年十一月十八日に京都を出発して鎌倉へ向かった。総大将は赤松上総介義則で兵力は二万と言われるが、この大軍が関東に到着する前に駿河の守護・今川範政が率いる駿河軍や越後から繰り出した上杉憲基の部隊が攻め進んで来たようである。反乱軍に追われていた鎌倉管領の足利持氏は、今川軍に護られて十二月三日には駿河国を発った。

その隊列が藤沢近くに差し掛かったとき、辺り一帯を埋め尽くす軍勢が見えた。「すわ敵か！」と合戦の身構えをしたのだが、それは將軍の御教書に従い恭順の意思を示すため始末書を手にして順番を待つ旧反乱軍の集団であった。その中には恥ずかしそうに笑う常陸国の豪族・大掾満幹の姿があった筈である。彼が誇る「京都御扶持衆」の肩書は、山入興義や小栗満重が預言したとおり何の役にも立たなかったことになる。反乱軍討伐の兵力は雪達磨のように膨れながら進んで行った。

上杉禪秀が將軍の弟である足利義嗣の謀反計画に同調して、將軍と鎌倉管領とを一気に除こうと企てた反乱には凡そ十万ほどの軍勢が集まった。日頃から足利氏の天下と執事である上杉憲基らの専横に不満が多かった武士たちが呼び掛けに応じたのだが、目的達成に失敗した計画は、たちまちに砕け散り幕府と言う巨大な機構が僅か数か月にして二十万とも言われる征討軍を揃えた。尤も、その大半は昨日まで反乱軍にいた武士団である。

應永二十四年の正月になると征討軍は三島から足柄(あしがら)山を越える部隊と、箱根越えで来る部隊とが一気に小田原、国府津と攻め進んで鎌倉に接近してきた。そして鎌倉に立て籠る上杉

禪秀以下の反乱軍は、少しずつ蒸発する様に滅び続け、決戦に臨む兵力は僅かに数百を数えるだけになってしまった。勿論、戦は負け過ぎるほど負けた。勇ましく旗を掲げてから僅かに数か月、誠に早いと感心もしておられず、門松が取れたばかりの鎌倉で足利満隆、足利持仲、上杉禪秀など主だった武将四十人ほどは自害して果てた。

「咲く時は花の数には入らねども散るには漏れぬ山桜かな」――反乱の名義人とされた足利持仲の辞世の一首である。鎌倉管領・足利持氏の弟に生まれ、叔父の養子となって本人は養父に従っただけなのに、幕府からは反乱の最高責任者に認定されてしまった。辞世のように、散る時だけ道連れにされたのでは適わないが「地位」とは、そう言うものなので、本人が知ろうと知るまいと、何か有れば責任を取るのが「名義人」であるのに近代は戦争責任を含め選挙違反、献金疑惑など、他人ごとで済ます張本人への責任追及が甘すぎる。

合戦の後始末は、勝った側が負けた連中をどうするかが基本になる。歴史の大部分は敗者に夢も希望も無く、命が助かるだけで儲けものだが上杉禪秀の乱の場合は少し違っていた。首謀者は全員が死んでいるけれども、何しろ御教書に従い降伏してきた軍勢が多すぎて容易に整理がつかない。主だった武将だけが尋問され始末書に署名捺印して「猿並みに反省:」と言うことで、取り敢えずは国許に帰された。調べるほうでも本心が分からない連中に集団で居座られたのでは不安である。最初からの味方にも反乱軍だった中に同族が多いから、いつまた敵に変わるか分からない。

この合戦では、もう一つ複雑なのが誰が勝者なのかハッキリしないことだった。上杉禪秀に狙わ

れた関東管領・足利持氏は調子良く鎌倉に凱旋してきたが、逃げ回ったり隠れたりしていただけである。京都から来た室町幕府の軍勢は反乱軍が鎌倉だけのクーデターで済ませてくれれば、これに協力したいのが本心であった。幕府軍より一足早く攻めて来た上杉憲基らは勝利が自分たちのもので支持率が高いと思っっているが、従う武士たちは恩賞が目当てである。さらに上杉禪秀への義理で反乱に加わった武士でも、降伏してきた大掾満幹のように、京都の將軍に忠誠を誓っていた者もいるから誰が何処でどのように繋がっているか分からず、下手に処分をすると次の騒動を誘発する恐れがある。実際に、その後も関東各地では小規模な反乱が頻発するようになったのである。

中途半端な権力中枢のことはさて置き、筑波山麓から出陣して「負け組」に入ってしまった大掾満幹、山入興義、小栗満重のことを心配すると、先ず一足先に小田原、平塚辺りの戦線を離脱した山入、小栗の両豪族は常陸国内に張られた佐竹軍の目をかすめて自分の領地に戻る事が出来た。そして出陣の疲れを癒す間も無く着々と合戦の準備を始めた。両武将は何処までも関東管領・足利持氏に抵抗する覚悟であった。それは反乱を起こした上杉禪秀とは関わり無く、「関東の武士団を統括する管領の理不尽に対する抗議」なのである。

武士とは、本来はそういう姿勢の筈なのだが、南北朝時代に二人の天皇が居て権力と財産の奪い合いを展開してからは「正義」とか「忠義」の本質が曖昧になって、武士も商売として儲かるほうに付く営利企業に変わってしまった。

將軍にも管領にも愛想を尽かしてサッサと帰還してきた山入、小栗両将とは違って、何処までも

將軍を信じ込んでいた大掾満幹も、應永二十四年（一四一七）の一月下旬には部下を率いて鎌倉近辺を去り、府中城へ戻ったと思われる。満幹は留守中の領土を確認したが、世間の目が鎌倉に向いていたから変りは無かった。將軍にも管領にも抵抗する気の無い満幹は、特に合戦の準備もせず、昨日までの戦場を遠くに感じて過ごしていた。

程なく「上杉禪秀の乱」に加わった武将に対する処罰が下された。幕府の御教書では「始末書」だけで済むような含みであり、幕府もそのつもりでいたらしいが、処罰を決めたのは関東管領の足利持氏であったから、その内容は個人的な憎悪に満ちて厳しいものであった。下総国の千葉氏、甲斐国の武田氏、上野国の岩松氏、常陸国の額田氏、そして持氏を変人呼ばわりした小栗氏や山入氏、真壁氏などが多かれ少なかれ領地を取られた。

そうした中で不思議にもある程度の覚悟をしていた府中城の大掾満幹には何の沙汰も無かった。実は反乱の首謀者・上杉禪秀と大掾満幹とは近い関係にあった。禪秀の子・教朝（のりとも）を満幹が養子にしていたのである。勿論、大掾家には跡取りが居り、それは山入與義の甥でもあるから、禪秀との関係は服従の意味を持っている。反乱責任者の処罰対象としてはA級に値（あた）いする。その大掾氏が何も言われないことは有り得ないのだが、お気楽な主従は気付かない。

「殿、これは最後まで鎌倉に残られた御英断の賜物でござるぞ…」などとまともに喜んでくれた。大掾満幹が養子にしていた教朝は、父親らが最後を迎える際に兄の持房と共に鎌倉を脱出した。父親の禪秀に何か言われたのかも知れない。兄弟は戦火をくぐり抜けて都へ辿り着き、將軍・足利

義持を頼ったのである。諺にも「窮鳥懐に入れば、狐師も是を殺さず」と言う。義持は兄弟を許し、將軍の側近として召し抱えた。関東管領に復帰した持氏は未だその事を知らない。上杉禪秀に関わりがあった武将は消してしまいたいのだが、將軍から「京都御扶持衆」とされている大掾氏らを罰するにはそれ相応の根拠が要るので、取り敢えずは城に籠って騒いでいる山入氏、小栗氏らを処罰して幕府の反応を見ていたのである。

大掾満幹は、自分だけが処罰を受けなかった引け目もあり、悪管領とも言うべき足利持氏に必死の抵抗を続ける山入與義と小栗満重を救援したいのだが表立ったことも出来ずにいた。特に山入氏の周りは上杉憲基の弟が相続した佐竹氏の領地、つまりは敵の勢力に囲まれている。どうしても北部の状況が気になるので、府中城を重臣に任せて自分は水戸城に詰めていた。

そうした折に都の將軍が上杉禪秀の遺児二人を匿ったことを持氏が知った。この二人はやがて將軍が管領の持氏を討伐するときに追討指揮官として鎌倉に向かうのだが、それは先のことである。今回の事件では將軍・義持も、管領・持氏も禪秀に狙われたが、持氏が將軍になりたい気持ちには変わらない。自分を狙った禪秀の子二人が主人である自分に降伏するので無く、自分のライバルである將軍を頼って助かったことが何とも癪に障る。これはどうしても許せないが、相手が京都に居るのでは手が出せない。調べてみると弟の教朝のほうが常陸の豪族・大掾満幹の養子になっていた。

悪い例えだが「坊主憎けりや袈裟まで憎い：」足利持氏は、反抗した常陸国の三人の武将のうち処分を保留していた大掾満幹にも重い罰を下す決

心をしたのである。

関連資料Ⅱ「時代の流れ」

鎌倉幕府を継承した北条氏が倒れた後に足利尊氏が室町幕府を開いたことになるが、その間には後醍醐天皇が実現した「建武の中興」（天皇による親政の実現）があり、足利尊氏も身内同然の北条氏を見限って後醍醐天皇に協力したのである。

北条氏は桓武平氏を称しており、八幡太郎義家の母方祖父である平直方から五代目が北条政子の父・時政ということになっている。石岡に所縁のある平貞盛の子孫になる訳であるから、戦時中の定説のように「天皇に征伐された悪人」として済ますのも残念なことと思われる。

確かに北条氏を滅ぼした「高時」は政務を放り出して闘犬やら田楽（民族芸能）などにうつつを抜かしていたようであるが、その祖父は日本の国難を切り抜けた人物であり、その前の時頼は諸国を巡って弱者を救済したという伝説を持つ。

そして鎌倉幕府の後を継いだことになる室町幕府にしても、歴代の將軍が良い政治を行ったわけではなく「興亡の連鎖」で紹介するように、家臣を含めて野望と争乱の歴史を展開している。

何よりも、北条氏を滅ぼして政権を奪い返した後醍醐天皇は理想ばかり高く、非現実的な天皇独裁とも言えるエゴ最良な政治をして足利尊氏らに背かれたのである。北条時代の方が良かったという庶民の声も聞かれたらしい。そこで、話の展開に直接は関係が無いのだが、時代の背景として実際に起きた事件の概要を拾い出してみた。

つまり、権力はどのような形で、誰が握ろうとも決して庶民の味方ではない―ひとたび権力の座

に座った者は「悪人」になる：…ということらしい。
文永十一年（一二七四）十月十四日

造船のために朝鮮半島から緑を奪ったと言われ
る「元（モンゴル）」の艦船九百隻と三万五千の
兵が博多に上陸し、迎え撃つ我が国の武士たち
は苦戦した。しかし夜になると敵軍は船に戻り
博多沖に停泊した。日本軍は小舟で襲撃をかけ
るなど善戦したが総体的には負け続けた。十月
二十日、九州地方に小さな冬の低気圧が発生し
て急に風雨が強くなり、元軍の艦船は大部分が
波に吞まれてしまった。

弘安四年（一二八一）六月六日

高麗国（朝鮮）の兵を従えた元の大軍が再び対
馬を侵し、さらに九州北部に艦船二千五百余隻、
兵員十万余をもつて攻め寄せてきた。各地の武
士が必死の防戦に努めたために敵軍は上陸が思
うに任せず、鷹島近辺に集まった。折しも台風
シーズンに入ったので、博多沖を猛烈な風雨が
通過して、元の艦船は大部分が沈没した。

弘安七年（一二八四）四月四日

二度に亘る国難を排除した当時の鎌倉幕府執
権・北条時宗が三十四歳の若さで世を去った。
残された嫡子・貞時は十四歳で執権職に就いた
が母方の祖父・安達泰盛と、内管領（家令）の
平頼綱（平氏では無い？）が権力争いをした。
このため、二度の国難で弱体化した幕府の統制
力はしだいに弱まってきた。

弘安九年（一二八六）十二月二十三日

天皇の後継争いが起こり、これを緩和する策と
して幕府が「両統迭律（りょうとうてつりつ）
の議」を提起した。これは後嵯峨天皇の子であ
る後深草天皇と龜山天皇が即位した後は、両方

の系統が交互に天皇を出すというものである。

平安時代末期頃から地位や名譽を欲しがる豪族
たちが皇室に土地を寄進して出世しようとした
ため天皇が保有する荘園が増えた。その財産を
目当てに欲に目が眩んだ皇族と、野心を持つ公
家たちが天皇擁立を目当てに争った。国難を乗
り切った後の幕府は、天皇家の相続問題など
に悩まされていられない。「交代制にする」と言っ
たのである。これに対して、後に反発したのが後
醍醐天皇であり、幕府が天皇の廃立に関わるこ
とを「不忠！」と否定したのである。

正應二年（一二八九）九月一日

鎌倉幕府の将軍として迎えられていた惟康親王
（後嵯峨天皇の孫）が追放され、後深草天皇の
第三皇子・久明親王が将軍となる。

正安三年八月二十三日

幕府執権・北条貞時が仏門に入り執権職を従兄
弟の師時と一族の時村に譲る。これに対して師
時の従兄弟・宗方が反発し密かに謀反を企む。
嘉元三年（一三〇五）三月二十三日

北条宗方が執権・北条時村を殺害し、貞時に誅
される。この陰謀には久明親王が関わっていた
疑いがある。

延慶元年（一三〇八）八月四日

久明親王が将軍職を追われ、其の子・守邦親王
が将軍となる。

九月十四日

第九十一代・後宇多天皇の第二皇子・尊治（た
かはる）親王が、両統迭律の順序に従って第九
十五代・花園天皇の皇太子となる。即位が幕府
に主導されることに反発した天皇は幕府転覆を
企むようになる。

應長元年（一三一二）十月二十六日

先の執権・北条貞時が四十一歳で死亡、先月に
は執権職に在った師時も世を去り、貞時の遺
児・北条高時は未だ九歳であった。一族の有力
者が執権職に就いたが、いずれも早死にしたた
め幕府は弱体化した。

正和五年（一三一六）七月

北条高時が執権となる。この人事は高時の側近
中の側近である安達時頭と長崎圓喜が権力を増
すために進めたものであり「天性軽忽にして知
慮遅れ、執権の器量にあらず」と言われた少年
が幕府執権の座に就いた。

文保元年（一三一七）四月

幕府は弘安九年に提起した「両統迭律の議」を
制度として定めてしまった。これにより天皇即
位に介入する幕府に対する皇太子・尊治親王の
怒りは増すばかりとなった。

文保二年（一三一五）二月二十六日

花園天皇は皇太子に皇位を譲り、第九十六代の
後醍醐天皇が三十一歳で皇位に即位した。譲位し
た花園天皇は二十一歳である。

正中元年（一三二四）九月十九日

後醍醐天皇の幕府転覆の計画が漏れ、関係者が
捕まる。（正中の変）日野俊基ら鎌倉へ護送

嘉暦元年（一三二六）三月十三日

執権・北条高時が病気を理由に出家し政務から
離れて遊び三昧の日々を送る。一族の金沢貞頼
や足利尊氏の義兄・赤橋守時が執権となる。

嘉暦二年（一三二七）二月六日

後醍醐天皇の長男・大塔宮護良親王が僧（天台
宗座主）となり比叡山に入る。

元弘元年（一三三一）五月五日

元弘の乱起こる。後醍醐天皇による再度の幕府
転覆計画が漏れ、関係者が捕らえられる。

……この年から元中五年（一三八八）までのこ
とは「興亡の連鎖 その二」の関連資料「その
時代の主な出来事」に、また、それ以後、永享
十年（一四三八）までの主要な出来事は「興亡
の連鎖 その一」の関連資料「それ以前の出来
事」に掲載済みである。

北条氏略系

平貞盛―平維将（維将の兄か弟が平清盛に続く
家系となる）―維時―直方（清和源氏・源頼信に
娘を嫁がせる）―時方（何らかの事情で祖父・直
方に養育される）―時家―北条時政（娘の政子が
源頼朝に嫁ぐ）―①義時―泰時（娘を足利氏に嫁
がせる）―時氏②―時頼―時宗③―貞時―高時：

- ① 義時から名越、極楽寺、赤橋などが分かれる。
- ② 時氏から阿曾氏などが分かれる。
- ③ 文永、弘安の国難に対処（元の襲来を防ぐ）

北条氏について頼山陽は「日本外史」で次のよ
うに擁護している。

「…頼朝、高官に陞り、重職を管するは、皆法
皇の允裁に出ず。私に之を竊みしに非ざるなり。
北条氏、其外家を以て、久しく其権を司る。未
だ嘗て人望を失はず。顕然たる罪ありしに非ざ
るなり。而るに遽に之に誅を加えんと欲す。是
れ朝廷未だ過無しとなさず。而して北条氏、又
之を反賊の利を獲る者に比すべからざるなり。
夫れ、頼朝の業を以てして、猶二世を過ぐるこ
と能はず。北条氏、乃、陪臣を以て国命を執る
こと、奕世累葉なり。是れ豈偶然ならんや…」

（付録）「反乱の結末」

佐竹氏のこと

始祖の平国香以来、常陸国府に桓武平氏の源流
を保つてきた大掾氏は、徳川家康が初めて江戸城
に入った天正十八年（一五九〇）に府中城を落と
されて滅亡した。しかし、その二十年ほど前から、
企業で言えば破産状態だったようで、府中城が他
人の手に渡っていたことも推定できる。

債権者に相当する敵は小田、江戸、佐竹など常
陸国で食い合いをしている連中であつたが、最後
には豊臣財閥から「勝手に始末して良い」という
委任状を受け取った佐竹が南下して来て大掾氏や
関わりのある一族を綺麗に潰したのである。

佐竹氏は、大掾氏ほどではないが常陸国に早く
から入り込んでいた豪族である。大掾氏が肥沃な
南部、筑波山麓から霞が浦沿岸に勢力を広げたの
に對し、佐竹氏は久慈郡の山中から常陸太田に出
てきて北部を支配していた。水戸を手に入れたの
はそれ程古い時期では無い。石岡市民の負け惜し
みではないが水戸城を含み水戸近辺は上杉禅秀の
乱が起こる頃までは大掾一族の支配地であつた。

佐竹家の申告によれば「佐竹」を名乗った祖先
は新羅三郎義光の孫である佐竹冠者下野守・昌義
となつている。「冠者下野守」は最初に何らかの勲
功で六位に叙され、それから下野の長官になつた
ことを示すのであるうか（下野守は従五位）…こ
の人物が天承元年（一一三一）に崇徳天皇の命令
で常陸国北部に起きていた豪族たちのお家騒動
（相続争い）を鎮圧するために僅かな人数で都か
ら下つてきた。住む場所も無かつたらしい。

昌義の父親は義業（よしなり）で「進士判官」
を名乗っている。現代で言えば東大を出て国家公

務員上級試験に合格し警察庁の中級幹部ぐらいに
なつていた…ということである。この人は水戸の
吉田地区を本拠とする大掾一族と婚姻を結び大掾
清幹の娘を妻としていた。なお大掾氏の宗家が、
八田氏の陰謀で源頼朝に潰されたときに、跡目相
続を許された馬場資幹は大掾清幹の曾孫になる。

常陸国の北部には、入手の経緯は知らないが早
くから八幡太郎義家の領地があつたようで、弟の
新羅三郎義光が後三年の役に苦戦していた兄の救
援に駆けつけ、褒美として貰つたとされる。当時、
義光は都で公務員として勤務していたが、東北地
方で苦しむ兄の為に職務放棄して戦場へ向かつた
のである。奥久慈の領地は長男の義業がこれを相
続し、本人は出世を目指して都へ出たから留守中
の領地は大掾氏が管理していたかも知れない。

佐竹昌義が、仕事でやって来た故郷に定着する
には母方祖父の大掾清幹から多大の援助を得てい
たことが考証されている。大化の改新の功績で藤
原鎌足が貰つたとされる奥常陸には、平将門を討
つた藤原秀郷の子孫が早くから進出していて領地
問題のトラブルが多かつたから、当事者でもある
佐竹昌義が解決を義務付けられたのであろう。

「佐竹は先祖が世話になつた大掾を滅ぼし
た！」と怒る市民が居るかも知れないが、親子兄
弟でも喰い合いをした戦乱の世、ましてや佐竹氏
は上杉禅秀の乱が起こつた時代から直系の系統が
絶えていた。草創期の恩義など誰の記憶にも無か
つたから戦国時代に騙し討ちで大掾一族を根こそ
ぎ討ち果たして常陸国を手中にしたのである。

佐竹義業の弟が「義清」であり、甲斐源氏武田
氏の祖と言われる。「武田」はひたちなか市の地名
で義清が其処から甲斐に移つたとする。ドラマな

どでは源氏の重宝である「御旗」と「楯無しの鎧」が武田家に伝わっている。これは八幡太郎義家が清和源氏の嫡流として伝えたもので、それがどうして庶流の武田に渡ったか：不思議でならない。

清和源氏と桓武平氏の血筋を引く八幡太郎義家は武士として名声が高く、昔は子供でも名前を知っていた。ところが、与えられた官位は正四位下と功績に比して低く、子供たちも不運であった。嫡男の義親は地方の国司として赴任中に反乱を起こして誅罰された。その遺児（孫）を義家が育てて後継者としたのが為義（頼朝の祖父）である。次の義国も都で藤原一族と争って母親の故郷に引退し足利氏と新田氏の祖先になった。

その他に何人か居た男子の中で最も知られたのが源義忠で、警察権、裁判権、場合によっては軍事権も持つ検非違使（けびいし）の職にあった。本来ならばこの人物が清和源氏の正統を継ぐのであろうが、ここに不可解な事件が起こる。義忠が家臣の鹿島三郎に殺害されてしまったのである。而も、犯人の鹿島三郎が「落とし穴」の仕掛けに落ちて身体中に刃物が刺さった状態で見つかる。主君を暗殺した犯人が変死したのであるから、単純に「罰が当たった」で済ませれば問題にはならないが、丁寧に落とし穴を掘る神様も仏様も居ないから誰かが仕組んだ陰謀という噂が立った。怪しめたのが新羅三郎義光なのである。しかし証拠が無いから逮捕もされなかった。その頃に暗殺された義忠と仲が悪かった叔父（義家の弟）の義綱が代りに疑われてしまった。怒った義綱の家族は山に立て籠もり抵抗して攻められた。此の事件は多くの史書が義光の陰謀としている。

これは勝手な推測だが、都に居辛くなった義光

は一時的に自分の領地である奥常陸に来て、そこから次男・義清の居る甲斐の国へ行った。その際に源氏の重宝を少年の為義から取り上げていったのかも知れない。長男の佐竹義業に預けても良いのだが、義業には平氏系の大掾一族が付いているから渡さなかった―義光の評判は良くない。

話を佐竹氏に戻すと、①昌義の代に藤原氏を騙すか服従させるかして常陸太田城に移った。昌義は源頼朝の父親・左馬頭義朝に従っていた。その子の②忠義は源頼朝に攻められて戦死した。当時、弟の③隆義は平氏に従っていたため、息子のうち長男の義政は頼朝に従うことを主張したが、弟の④秀義らは抵抗する姿勢を示した。

義政は僅かの供を連れ、頼朝に会うために園部川の矢橋まで来たところを上総介広常に殺害されてしまった。その首塚が石岡市に残っている。鎌倉の軍勢は金砂山城に総攻撃をかけたが天険に拠った佐竹軍に叩かれて散々な目であった。そこで鎌倉軍は謀略で滅ぼそうと隆義の弟で性格の良くない義季を騙し、裏口から案内をさせて城を落とすとした。辛うじて逃れた秀義は各地を潜伏した後頼朝の奥州征伐時に宇都宮で帰順した。その時に源氏の白旗に「軍扇」の紋を入れるように命じられ、以後、佐竹氏の家紋とした。

秀義の嫡男が⑤義繁で源頼朝から常陸国の守護に命じられた。その子⑥長義は北条氏に仕えた。⑦義胤は鎌倉に定住したらしい。⑧行義の母親は北条氏の重臣・二階堂氏の娘である。⑨貞義は楠木正成が立て籠った時に攻撃軍に加わっていた。

⑩義敦は足利尊氏に従って各地で戦った。なお、義敦の末弟・師義から、大掾氏と関わる山入氏が分かれる。⑪義信の時代に「有明の松」伝説に関

わる難台山事件が起こる。母親は小田氏である。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪

次の十二代・義盛の時代に佐竹氏は「関東の家」に指定された。妻は那珂川流域に進出してきた江戸氏の娘であるが男児が無く女子が一人あった。当然、継嗣問題が起こり一族から養子を迎えるのが一般的のだが、これに目を付けたのが「上杉禅秀の乱」で攻められた上杉憲基の父親で、同じく鎌倉執事を務めていた上杉憲定である。自分の次男である義憲を養子として佐竹家へ送り込んだ。そのため佐竹の第十三代当主の座は、義盛の娘婿となった上杉義憲に移ってしまう。義憲は暫く鎌倉に居たまま「佐竹義人」として佐竹家を相続した。これに対して佐竹一族は異議を唱え、第九代から分かれた山入與義（やまいりよりよし）を当主とするように要求して支城に立て籠った。

この騒動に関東管領・足利持氏は上杉禅秀の娘婿である岩松持国を將軍とする軍勢を派遣して籠城軍を攻めた。しかし数か月間も抵抗が続き、両方が疲れた。城方は食糧が尽きたので、已むなく敵に申し入れを行い、「主君は鎌倉から迎えても国は佐竹の土地である…」ことを確認させてから義人を第十三代の当主に迎えた。佐竹源氏の正統が絶えて上杉氏（藤原系）になったのである。やがて上杉禅秀の乱が起こったときには、そう言う背景もあって、山入與義は反乱軍に加わったのである。石岡市史などには触れていないが大掾満幹の妻は山入與義の姉か妹であったらしい。義人は義仁とも書いた。自分の立場を知っているから国内の抵抗勢力に配慮して山入氏などには寛大な態度で臨んだようである。義人の後は三男の義俊（よしさと）が第十四代を継いだ。この代

【特別寄稿】

に足利持氏が將軍に討たれた永享の乱に絡んでと思われる内乱があり、実定という弟が太田城に居て義俊は家来の家に居候をしていた。実定の弟は義俊（よしかず）と言い大掾満幹の養子となつて府中城（石岡）に居たのだが、満幹の遺志にも関わらず大掾一族の嫌がらせとイジメにあつて常陸太田に戻つた。有能な人物だったようで「南殿」と呼ばれ佐竹氏の立て直しに貢献している。大掾氏、強いては石岡のためにも惜しいことであつた。

第十五代は義俊の長男・義治であるが、この人物の代にも合戦があり佐竹氏の苦難時代らしい。義治の子（第十六代）義舜（よしきよ）も一族の謀反によつて城を追われた時期があつたようで、流石に戦国時代である。第十七代の義篤（よしあつ）が家督を相続したのは十一歳のときであるが叔父の後見を受けて、小田氏などと戦つていた。第十八代の義昭は合戦で小田原辺りまで出かけている。この人は先妻を亡くし後妻として府中城主・大掾憲幹の娘を娶つた。

義昭の子、第十九代・義重の時代には武田信玄が小田原の北条氏と戦つており、佐竹も北条に背いた。水戸城を攻略したのは義重である。そして、義重の子・第二十代の義宣（よしのぶ）が小田原征伐のために関東へ来た豊臣秀吉に詔つて常陸一國を勝手に許しを貰い、府中城を攻撃して大掾氏を滅亡に追い込み石岡を焼いた犯人である。徳川家康の世となり、関ヶ原の合戦で中途半端な態度をとつた佐竹氏は、大幅に所領を減らされ水戸から秋田へ左遷されて義宣も雪国で風邪をひいた。秋田の初代は次男の義隆である。

（引用文献：佐竹系譜 前太平記、日本外史、藩幹譜ほか）

「新治・筑波を過ぎて…」を読んで 太田尚一

本紙第五十一号、鈴木健氏の独自の視点からの古代史解釈、大変興味深く拝読させていただきました。これを古代史研究の泰斗志田諄一先生にお送りいたしましたところ、左記に掲げますコメントをいただきました。先生のご承諾をいただきましたので、寄稿いたしました。

『火焼ひたぎの老人おきな』志田諄一

火焼の老人、クイズ解答者と論ずる鈴木健氏説はおもしろいが、問題は火焼の老人の性格である。火焼の老人が酒折の宮の祭儀の場で火をたいたのは、浄めのためであり、火は神と人との媒介をなすものと信じられ、神降しの目的から火をたいたのである（竹野長次「古事記の民俗学的研究」）。

折口信夫は「おきな・おみな」の古義は、国邑の神事の宿老の上位にある者を言うらしい」と説いている（翁の発生」折口信夫全集第三巻）。

火焼の老人は酒折の宮の司霊者で「物知り」であつたから倭建命の問いに対し、旅程の日数答えたのである。火焼の老人が任じられたという「東の国造」は行政者ではなく東国の神を祀る司霊者の性格を帯びていたのであろう。

本居宣長は「常陸より甲斐までの程、昼夜懈おこたらず勤いそしく仕へ奉りて、当方の国々を経来りたる勢を賞めて、東国造と云称号を賜へるにもあらむか」とするが『古事記伝』第二、誤りである。宣長はさらに続けて「此老人、今御火を焼きて夜庭に伺候さむらふにつきて、新治筑波より此処までに、夜昼伺候ひ勤めたる、己が労を以て答

へ奉りたらむ」と述べているが、火焼の老人は、倭建命に従つて行を供にしたのではなく、酒折の宮にはじめからいたのである。

「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」は、倭建命が酒折の宮までの苦勞を訴えた言葉であり、「かがなべて 夜には九夜 日には十日を」は火焼の老人が神の言葉として、その苦勞をねぎらつたのであろう。

『古事記』では、甲斐から信濃を越えて尾張の国に還つた倭建命は美夜受比売（みやすひめ）のもとに逗留したとある。美夜受比売が酒づきを捧げて献ずるとき、打掛（うちかけ）の裾に月の物がついているのを見た倭建命が

久方の 天之香具山 利鎌とかまに さ渡る
鶴（くび） 弱細（ひほそ） 手弱腕を枕かむとは
吾はすれど さ寝むとは 吾は思へど
汝が着せる襲（おすい）の裾に 月立ちにけり

と問いかけの歌をよむと、美夜受比売は
高光る 日の御子 安見しし わが大君
あらたまの 年が来経るれば あらたまの
月は来経往（ゆ）く うべな うべな
君待ち難（がた）に わが着ける 襲の裾に
月立たなむよ
と答えている。

美夜受比売は草那芸（くさなぎのつるぎ）に宿る神靈に奉仕した司霊者である。したがつて倭建命は、ここでも司霊者に問いかけ、答えの言葉をうけているのである。

▽しだ じゅんいち 文学博士

元茨城キリスト教大学学長・元市制三十周年記念『石岡の歴史』
市史編纂専門委員委員長・元『石岡市史』下巻（通史編）監修者・
日立市郷土博物館館長。

【風の談笑室】

今月号は、思いがけない投稿が、崙書房の太田尚一さんからあり、特別寄稿にご紹介しました。

当「ふるさと風」も50号を越え、最近では、色々な方からの御意見・御感想などを頂けるようになります。会員の大きな励みにもなっております。

八月号には、これまで風の会としては、取り上げてこなかった太平洋戦争、原爆の話について、無記名の投稿を頂き、掲載させていただきました。大層に嬉しいことです。

この春から、鈴木健さんより継続して投稿頂けるようになりましたが、その早速の反応を頂き、編集事務局としては大喜びです。

さて、鈴木さんの「新治 筑波を過ぎて」の文に対してのご指摘を頂きましたのは、茨城県の古代史研究では「高名な志田諄一先生ですが、この御指摘に関係して、小生も編集者を離れて、一脚本家として参加させてもらいたいと、以下に誌させてもらおうと思います。

× × ×

火焼き老人の性格については、志田氏の述べることに反論はない。鈴木氏の文において重要なのは、最後の『古事記等にはほかにも同じようなクイズがはめこまれている気配がある。千三百年たってもそれに気づかないのでは、太安万侶大人もアイソが尽きるのではないだろうか』である。

脚本家、物語作家としたり、太安万侶の書いた文中の人物の性格以上に、重要なことである。何故なら、ここ最後の文に鈴木氏の物語が存在するからである。

古事記は、暦を記すがごとく、事実を正確・忠実に書かれたものではない。現政権を正当化する為

に書かれた物語である。太安万侶が説話等を編纂する様な形で書いていったのであるが、そこに書かれてあるのは歴史としての事実ではなく、太安万侶の物語と違ってよいだろう。勿論、古事記が歴史の意味がないと言っているのではない。物語であつてもそこに登場してくる人物には、その当時の性格があるので、火焼き老人の性格は志田氏の御指摘の通りなのであろう。

最近テレビでよく韓流ドラマをみる。脚本家としてのドラマをみると、実に展開の構成が乱暴なのである。あれッ、昨日居たあの人物は何所へ行ってしまったんだ？ そんな事が頻繁である。しかし、それだからと言ってドラマとして滅茶苦茶かというところではない。むしろその支離滅裂に近い展開が観客の心を捉えてぐいぐい引張っていく。日本映画全盛の頃の作品をみると、今の韓流ドラマと似た展開が沢山あった。少しでも面白く、楽しい映画を、という情熱が乱暴な構成を許す力を持っていたのだらうと思う。実際の所、名作といわれる文芸小説でも、乱暴な構成が沢山ある。しかし、その乱暴さは、既成を打ち破る強い力となって発揮している例も少なくない。

鈴木氏の文を読んで注目すべきは、クイズではなく、「太安万侶大人もアイソが尽きるのではないだろうか」である。そこに太安万侶が考えたのかもしれない発展のドラマ、物語の発展性が存在するのである。火焼きの老人が神の言葉として言ったのであれば、国造を給ひき、などの事は詰らなく、「あッ、そう」ということになるのではないだろうか。神の言葉として言ったとしても、それがクイズの回答であつたとすれば、太安万侶の洒落なドラマとして新しい発展をみることになる。もし

古事記が完全な歴史的な歴史の記録であつたとすれば、古事記をこんなに面白く読むことはできない。それはやはり、鈴木氏の言う太安万侶もアイソが尽きる、に尽きるのではないだろうか。

× × ×

さて、打田兄が、6月頃から千枚を超す長編物語に挑戦しています。打田兄の会報の原稿が年一杯分程、溜まっているので、一度千枚を超す長編に挑んでみると、新しい視点、視野が広がるのではないかとお勧めしたのであつた。

長編に挑戦する為には、長編になるテーマを探さねばならない。テーマにはそれぞれ短編に向くもの、長編に向くものがある。どんなに壮大なドラマを感じさせる内容であつても、短編にしかならないテーマがあり、その又逆もある。

5〜6枚にしかない掌編小説の題材を、千枚の長編にと思つて書き始めても、決して書けるものではない。そんな事をお話して、長編に挑んでもらつたところ、「歴史の嘘」というテーマを見つけた。その企画書を拝見したところ、そのテーマは十分に千枚を超す長編を書けるものであつた。

年齢としたり、小生の大先輩なのであるが、よくぞ長編にチャレンジしてみようと決意された、頭が下がる。

以前、打田兄が、民話ルネサンス塾の受講生であつた頃、百数十枚の原稿を突き返し、書き直しを言った事があつた。ルネサンス塾は、市民プロを育成することを目指したので、突き返されてそれで脱落するようならば、それは市民プロとしての資質がなかったと言うことだろうと、非情な気持ちで突き返したのであつた。その原稿は二百数十

枚にまとめ上げ、完成した。当時の事を、打田兄に「突き返すのに勇気が必要だった」と話したら、すかさず打田兄から「突き返された方はもっと勇気が必要だった」と切り返された。それはもう6年も前の事になる。懐かしいと言ったら、打田兄から今度はなにを言われるか知れたものではないので、言うのはやめる。

今回の、千枚を越す歴史物語に挑戦してみませんか、に応え兄は、歴史の嘘をテーマに、一部、二部を書きあげた。二百枚程だから、まだまだ先は長い。しかし、一部、二部は大層面白く書けている。完成が楽しみであるが、どのように発表して行こうか、嬉しい頭の痛め方をしている。

小林幸枝さんが今月の文に書いていたが、美浦村の陸平をヨイシヨする会から、来年二月の縄文の森コンサートに招かれて公演を行うことになり、その打ち合わせに行ってきた。正式な要請の前に、6月公演の時に、ヨイシヨする会の委員の方々が、朗読舞の見学に来られた。その時、会員の中にモダンバレエの小峰久美子さんが居られ、小林さんの舞いを見て、是非一緒にモダンバレエとのコラボレーションができたらとのお話があった。小林さんにとっては、良い経験になるので、即断に了解の返事をさせていただいた。

陸平をヨイシヨする会の市川さんとは、主宰されている劇団「宙の会」の公演を美浦村へ観にいき、美浦村の方々の応援ぶりに驚き、原稿を書いたことがきっかけで、以来お付き合いさせていただいている。霞ヶ浦を囲む一万人朗読会を発想した時には、真っ先に賛同を頂いた。しかし、一万人朗読会の企画も

ふる里の歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

(毎月第2土曜日 19時より)

いしおか補聴器では、らふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさととの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

9月11日の朗読会は、打田昇三作「興亡の連鎖(その6・失意の谷)」です。「現在の石岡市が元気が無いのは、古代の国府だったこの地に連綿と続いた豪族が六百年前の事件によって没落してしまったことに遠因があるように思えてならない。石岡の大掾一族が滅亡へひた走る戦乱の世の物語を、打田史学に考証して行きます。

※10月9日の朗読会は、ふるさと民話集です。

定員は10名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読後、作者を囲んでのお話し会があります。

朗読会参加料金 1,000円 (コーヒーor お茶、お菓子付き)

いしおか補聴器 ☎0299-24-3881

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけはいけません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(場所：石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

他の地域の人達の声は今一つ盛り上がってこない。メディアだけが何時やるんですかと喰いついてくるのであるが、前途多難である。

二月のヨイシヨする会の森のコンサートでの公演では、以前に縄文人賛歌を舞劇にした事がある話などをベースに、何か考えてみたいと思っている。

小林幸枝もその時にはパーカッションの矢野恵子さん(オカリナの野口善弘さんの奥さん)の演奏するドラムに舞を楽しんでいたもので、今度は、小峰さんの舞と一緒に楽しめたらいいなと思っている。勿論、素朴な土笛も一緒に。

ことば座も、この風の会も少しづつではあるが認知度も上がり、色々な方々との交流も生まれてきた。とても嬉しいことである。小さくても良い。自分の主張を精一杯の大声で言うことが、ふる里を元気にしていく事につながるだろうと思う。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第26話

難台山城 落城哀歌

11月12、13、14日(午後2時開演)

「たとえ命落すとも、そなたを思い、子を思う我が心は消えぬ。狐に姿をかりても必ずや逢いに参らむ。子忍の森に我を待て！」 鴨長明の「方丈記」に導かれて、難台山城の希望なき争乱の影に残された武将の妻の哀歌を、手話の舞に舞う。

古里に生まれた新しい舞台表現「朗読舞」の女優小林幸枝が

舞の表現スケールを益々にアップして、常世の国に語り伝わる

南北朝争乱の秘話を舞い演じます。

生涯学習として平家物語全句朗読に挑戦する
兼平良雄(ことば座特別研修生)第二回朗読会。

「平家物語第百二句 扇の的」同時上演。

脚本：演出 白井 啓治
音楽：効果 野口 喜広 (オカリナアート JOY)
舞台背景画 兼平ちえこ
舞台装美 小林 一男

朗 読 しらみひろぢ
舞 技 小林 幸枝

入場料3000円(中学生2000円 小学生1500円) 入場券は、ギター文化館 0299-46-2467
いしおか補聴器 0299-24-3881にて取扱っております。

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。
研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

◎募集要項 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
募集人員：6名程度(最大10名まで) ※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
養成期間：1年間(入塾は随時受付けています)
指導月4~6回
受講料：月額30,000円(全・半納割引有り)
※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当：白井)までお問い合わせください。